拾いものの命

渡部みさ子

「大動脈縮窄症」これが生後一ヵ月の息子に下された診断でした。即刻入院でした。七年ぶりの赤ちゃん、待ちに待った男の子だったのです。私の手元にあったひと昔前の文献には「大動脈の一部に狭窄のあるもので、一年以内に死亡する。」と書かれていました。目の前が真暗になりました。「どうしてうちの子が……。」妊娠中をふり返ってみました。親戚の顔を思い浮かべてみました。何も思い当たるものはありません。原因不明なものがほとんどだそうです。でも、なぜ、と泣き崩れている時に、ふと、大学時代の先生のお言葉が思い出されました。

「そんな時母親達は原因ばかりを考えるが、大事なのは、今、目の前でおなかをすかせて泣いている子にミルクをやることなのです。」私は考えました。「そうだ、今私は何があの子にしてやれるだろう。」と。ああ哀しきかな、その時私にできたことは、衣類の洗たくと、二時間しかないガラス越しの面会に行ってやることだけでした。あの子に私が見えるわけではないのですが、私が見ていれば寝たまま一人で飲まされるミルクを、時々看護婦さんが抱いて飲ませてくれるからです。あとは、ただ祈ることしかありませんでした。

しかし、心臓外科の技術の進歩はすばらしく、この十年の間にこの病気は手術（成功率七十五パーセント）で治すことができるようになっていました。主人が言いました。

「失敗してもあの子はまだ何もわからない。結局は私達の気持ちの問題だ。そして、もし運良く成功すれば、あの子はきっと一角の人間になるにちがいない。生きるよ

り選ばれた人間なのだから。大きくなった時この傷跡があの子の勲章になるだろう。」

私の心も落ちつきました。そして、万が一の時のことを考えて出産祝いのお返しを急ぎました。

入院して十四日目、手術となりました。病棟から手術室まで抱かせてもらった我子は、入院前とかわらぬ顔をして、よく見えない目であたりを見回していました。一瞬、生きているこの子の見納めになるのではという思いが脳裏を走り貫けました。待つこと四時間、手術は無事終わりました。外科病棟に移された息子は、まるで何事もなかったかのように安らかに眠っていました。本当に手術を受けたのだろうかと、何だか不思議な思いにつかれたのを覚えています。手術よりもその後の一週間が怖いと言われていたのですが、経過は至極良行でした。数ヶ月もお世話になる子もいると聞いていた人工呼吸器は一日で取れ、十日目には面会時間に私が抱いてミルクを飲ませることもできるようになりました。面会時間が待ち遠しくて、毎日が面会時間を中心に回っていました。

手術後三十日、病院でかぜが流行したお陰で、思ったよりも早く息子は退院することになりました。部屋を暖め、哺乳瓶を消毒し、おしめをたたんで、布団を敷いて、皆の待つ我家へと、息子は帰ってきました。上の娘は久しぶりの弟との対面に大はしゃぎでした。主人は病院で義務づけられていた白衣を着て息子を抱きに来ました。私はというと、その瞬間から目の回るような生活が始まったのです。飲んだミルクの量をチェックし、尿量を知るためにおしめの重さを量り、体温・脈拍・体重を測り、薬を一日五回飲ませ、それら全部の記録を付けなければなりませんでした。あっと言う間に、ほこり高き家となりました。今思い出してみてもよく頑張ったと思うのですが、あの時の私は幸せ一杯でした。自分の手で我が子を育てられるということが、おしめを替えて、ミルクを飲ませて、抱いて寝かしつけてという、ごく当たり前なことのひとつひとつが嬉しくてしかたなかったのです。上の子の時などは、世界が狭くなり、毎日が同じことの繰り返しに思えて飽き飽きしたり、子供がぐずっ

て家事が思うように進まない時など、イライラしたものでした。それがどうでしょう。息子の時はただの一度もそのような気持ちにはならなかったのです。ただ、ありがたい、ありがたいと思って毎日を暮していました。

今、息子は三才になりました。その後も、肺炎などで二度入院し、はしかにもかかり、何度か蒼くなるような思いをさせられましたが、私は子育てが楽しくてしかたありません。この子と共に生活している毎日が何と充実していることでしょう。神様がこの子を私に授けてくださったことを、私は今、深く感謝しています。この子の存在が私にどれだけ多くのことを教えてくれたか分かりません。拾いものの命だからこそ、より豊かな人生を送らせてやりたいと思います。いつ命絶えるとも「ああ、楽しかった。」と言えるような一生をそれが私の務めだと思っています。

二カ月間

福島千恵

それは忘れる事ができない。昨年の九月二七日の夕方の事である。電話のベルが鳴った。「川崎の幸警察の者ですが」ドキッと緊張する。「福島一朗さんが川崎駅付近でバイク運転中、乗用車と接触、足を骨折して第二国道病院に入院しました。今手術中だと思います。」サーッと血の気の引く様子がわかる。「怪我は骨折だけですか。他は頭は大丈夫ですか」という私の質問に傍の人に確認して「その様です。詳しくは病院に尋ねて下さい。」と言って電話番号を教えてくれた。長い長い二ヵ月の始まり